

知り合いから託された実験体が明らかに性的な悪戯をしてくるので、生意気な助手を遊び相手として差し出そうと思います

体験版

受け：溝口

攻め：志村

要素：クール受け、触手責め、乳首責め、前立腺責め、媚薬、拘束、潮吹き、強制絶頂

「ぬわ—————！！！！」

突然の大声を出してしまいましたが、どうかお許しいただきたい。頭脳明晰な私が、このような醜態を晒すことはほぼないと言ってもいいんです。でも今、私の人生史上最大のピンチです。なんとも信じがたいのですが、現在謎の生命体に襲われています。

「えっ、餌じゃない！私は餌じゃないってば！」

うじゅうじゅうと私にまとわりついている大きなゼリーのような生命体は、自作の発明品ではない。知人の研究者からの預かりものだ。海外の研究者の集まりがあるから、その間面倒を見てほしいと託されたものの、正直見た目はかわいくない。粘液を纏ってテラテラと艶めいているし、色も濃いピンクで卑猥だ。主な餌は水分と、知人が渡してきた液状の栄養剤で、そもそも肉食ではないらしい。無害で人好きな生命体なので、時々ゲージから出して遊んでくれと言われていたから、さすがに出してやるかと情を見せたらこれだ。透明なゲージの扉を開けた瞬間私に飛びついてきて、四肢を絡めとってしまった。滑るせいでなかなか掴みにくいし、意外とパワーもある。必死に抵抗しても、正直脱出の糸口が掴めていない。

「ふんぬぬぬぬ...！と、取れない、何これちょっと良くないよ！？私、いろんな意味で食べられちゃうんじゃない！？」

ただ、これがまだ謎の生命体なりのじゃれ合いなら諦められた。スキンシップの一種なのだと。でも母体からうじゃうじゃと伸びた触手が、明らかに私の股間と胸を狙っている。もしこれを拒まない場合、どんな未来が待っているかを考えるだけで恐ろしい。

とはいえ、最適な環境でぬくぬく育った触手君と、毎日デスクワークでへなちょこな私との体力差がある。このままいったら貞操の危機だが、力比べでは勝てそうにない。

ならばあらゆる手段を使って母体ごと破壊してしまう手もあるが、いつかこの生命体が医療や科学の分野で欠かせない存在になるかもしれない。まだ試験段階の今、知人の研究を台無しにすることは避けたかった。

しかしそうして脱出の手段を考えているうちに、空中で私の両足が大きく開かれてしまった。その中心を狙う触手が5本ほど左右を取り巻いていたので、いよいよ冷静ではいられなくなる。

まずい！世界の誰も望んでいないのに、あろうことかこの私が犯されてしまう！
とんでもない！エッチなことされちゃう！超ドスケベエロ同人誌みたいな展開になってしまう！

「ぎいやあああ！！！！やめてやめて、美味しくないから助けて——！！」

「博士、さっき何か叫び声が聞こえ——」

けれども私には、優秀な助手がいた。彼はいつも、最高にナイスなタイミングで私の元に来てくれる。

「いいところに来た！溝口君！いやぁ助かった！」

私の叫びを聞いて現れたのは、いまや研究所にはなくてはならない存在である、クール男子の溝口君だ。今日も打ち合わせやら研究の補助やらで忙しそうな雰囲気醸し出していたけれど、私の窮地に駆けつけてくれたらしい。このチャンスを逃すものかと、私は溝口君に助けを求めた。

ただし彼は基本的に冷たい。だから私を心配してくれてくれたはずが、現状に目を向けたあと、呆れたようにため息をついた。それから冷え切った目で私を見て、体を半分ドアに向ける。

「...志村博士にそこまでの変態的趣味があるとは思いませんでした。邪魔しないよう、僕は出ていった方がいいですね？」

「違うよ！？見てほら、捕食されかけてる！早く私を助けてよ！」

「どうせ自分で迂闊にゲージを開けたんでしょう？お知り合いからは遊んで欲しいと言われているようですし、実験体と楽しんだらいいじゃないですか」

「遊びって言っても、こういうアダルトな遊びだとは思わないでしょ！」

「元々僕は預かることに對して反対でしたので。ご自身で起こしたトラブルは、博士が自分で何とかしてください」

「なに！？まさか放置する気！？私を見捨てるの溝口君！？」

「本気で生命の危機になるまで呼ばないでくださいね」

そして薄情な彼は、あろうことか絶体絶命の私を見捨てて自分の仕事へと戻ろうとした。冗談を言う性格ではないから、溝口君は本当に私を見捨てるつもりらしい。信じがたい、冷たい中にも優しさがある人間だと思っていたのに裏切られたと、私は思いつく限りの言葉で彼をなじろうとした。

けれどもくるっと踵を返そうとする溝口君を見て、なぜか触手がピタッと動きを止めた気がする。なんなら、私に向かっていた触手の矛先が、じわじわと溝口君に向かっていく。その不穏な空気を察知して、溝口君も動きを止めていた。ドアの方を向いていた体が、再びこちらを振り返る。

「な、何ですか。なんで僕の方に近づいてきてるんです？」

「いや、分からないけど…。実験体の好み？」

自分の傍に寄っていく触手を見て、溝口君はひくりと表情を歪めた。見た目がグロテスクなので、彼の気持ちは痛いほど分かる。けれども私は、この触手の行動に可能性を感じていた。

この実験体に、どれほどの知能があるかは定かではない。でも私と溝口君を比べた時に、彼の方に興味を示したのは確かだ。これは幸いと、私は腕を思い切り振って、溝口君を指さして言った。

「ねぇ触手君！あっちの彼の方が若くて元気で遊びがいがあるよ！しかも溝口君は気持ちいいことが大好きだから、ねちょねちょのドロドロにして遊んであげると喜ぶよ！」

「はあ！？ちょっ、あなたって人はとんでもないことを——！？」

実験体に音を検知する機能が備わっているかも、言語を理解する知能があるかも全く知らない。それでも本能がそうさせるのか、私の言葉を聞くやいなや、母体も含めて触手全てが溝口君の方に猛烈な速度で移動していった。そしてすぐさま全身に触手を巻きつけて、うじゅうじゅと彼にまとわりつき始める。心なしか、私に触れていた時より嬉しそうだ。

貞操の危機を逃れた私は、粘液で濡れた上着を脱ぎながら彼の方に向かった。触手は溝口君に夢中なのか、私が近づいてもこちらに向かってこないようだ。

「いやぁ…。危機一髪難を逃れた」

「押し付けたと言っただけですか！僕になすりつけるなんて最低ですよ、博士！」

「これは実験体というか、その触手君の好みの問題だから。私のせいじゃありません。それにしても好かれてるねえ、溝口君。ぎっちり掴まれてる」

「何一つ嬉しくありませんけど！ちょ、おい、動けないだろ…！手を離し、ッ、むぐうっ！？」

けれども他人事だと楽観視してられる時間は短かった。私と対峙しているときはほとんど行動を起こさなかった触手のひとつが、なんと溝口君の口の中に滑り込んでいったのだ。それだけならまだしも、彼の口の端から謎の液体が零れていっている。ごぼごぼと苦しそうな溝口君の声が聞こえたので、さすがの私も焦った。

「ええええ！？ちょ、大丈夫なの溝口君！それ何飲まされてるの！？息できる！？」

「むう〜〜〜っ！んんぐ、ぐっ、ごぼっ、ぐうっ！！？」

「ちょ、ちょっと触手君！丁寧に扱ってよ！？溝口君にはなんでもしていいわけじゃ、ぬわあああんっ！」

確かに自分が危険な目に合うくらいなら、溝口君の方についてくれとは思った。でも彼に危害を加えるようなら話は変わってくる。このまま呼吸を妨げるつもりなら許さないぞと、彼の口に入る触手を無理矢理引きはがそうとした。けれども私の行動が気に入らなかったのか、人の腕ほどの太さの触手にべちんと弾かれて、2メートルほど吹き飛んだ。思った以上にパワータイプな触手の攻撃に、私の心はポッキリ折れてしまう。

「ひええ...！暴力反対、危ない、怖すぎる、もうお嫁にいけない...」

「んんう、ッ、はかへ、たすけっ...！」

「もう無理だよぉ...！非力な私じゃ無理なんだよぉ...！」

「そ、な、う、げほっ、げほっ！！」

ただ、私が溝口君を助けることは不可能だと諦めたところで、彼の口から触手は抜けていった。溝口君はかなり苦しそうだけれど、あの実験体が彼を殺めるつもりだったなら、わざわざ解放はしないだろう。だからおそらく、殺意はないはずだ。

実際よくよく観察すれば、むしろ触手は楽しそうでもある。ぺち、ぺち、と溝口君の身体を服越しに撫でては、彼の反応を見て遊んでいる。なるほど、ではやはり触手君はじゃれているだけなのだと思うと、考え方が変わってきた。

このまま無理に実験体と溝口君を引きはがすのは無謀だ。だったらいっそ、知人から実験体の様子を共有してくれと言われていたので、研究協力として受け入れようじゃないか。

「よし、溝口君。もうこうなったらこれも研究協力だと思って諦めよう。今からこの実験体の行動や反応を私が記録していくから、溝口君も付き合ってね」

「なっ...！？まさか僕を見殺しにする気ですか！？諦めないで助けてくださいよ！」

「人に危害を加えない安全設計って言われてるし、多分平気！」

「ふざけないで、くださ...っ！これのどこが、あんぜんに、みえ、う、うう...？」

そして私が心を入れ替えたころ、文句ばかり言う溝口君にも変化が現れた。普段は言葉で人を刺し殺せるほど流ちょうに動く彼の口が、うまく回らなくなっている。滑舌もあやしいし、全体的に脱力しているように見える。一方で彼本人は嫌がっているので、意思では拒んでいるのに、身体がついていかない、といった感じだろうか。

「なんだか力が入りづらくなってるみたいだね。さっき溝口君が飲んだのって、筋弛緩剤みたいなもの？」

「ん、わから、あ、い、んん、や、だ、服が、やだ、やだっ...！」

自分の変化についていけない溝口君は、それでも必死に抵抗を続けていた。けれども器用な触手たちは、彼の力が入らないのをいいことに、せっせと衣類を脱がせていく。白衣を地面に落とし、ベルトも外し、上着やズボンのボタンを引きちぎることなく脱がせていた。細かな動きもできる細い触手を見て、思わず僕も感心してしまう。

「すごいね。最近はロボでもかなり精密な動きができるけど、こんなに細かく動かせるなんて。あ、メモ取らないと！触手の先端は非常に細かい動作が可能で、ボタンやベルトの着脱が可能、と...」

「の、呑気にメモなんて...！くそ、なんで脱がせる、意味が分からな...、ひいっ！？」

さすがに彼の痴態をカメラで録画して提供するわけにはいかないので、手近な筆記用具を見つけてメモを取っていく。気づきを簡易的に列挙して、なるべく触手の動きを観察するよう心がける。

見たところ、触手たちは器用なだけではなく、様々な形に変化させられるらしい。小さい悲鳴をあげた溝口君の前には、直径5センチほどの触手が2本うごめいていた。上下にぱかぁ、と口を開いたその中から、更に細い触手がイソギンチャクのように湧いてくる。

「っ、なん、なんですかこれは...！？」

「それが何かは上手く説明できないけど、2本あるから君の乳首にくっつけるつもりなんじゃない？」

「こんな得体のしれないものを...！？い、やだ、こら、近づけるな、〜〜っやだやだやだ！」

うにゅうにゅうと細い触手をざわめかせて、徐々に触手が溝口君の両乳首に向かっていく。どうやら私の予想通り、あれは乳首責め専用の触手らしい。なるほど、

この実験体は自らの意思で、遊ぶ場所に合わせて形態を変えるのかと予測をしたあたりで、彼の乳首がぱくりと触手に咥えられた。

「ふああああ...ッッ！！？んんんっ！っあ、ひ、や、ああ、っ、ん～～
～っ！」

「お～、すごいすごい。あのイソギンチャクみたいなのが、触手の中で動いてる感じ？」

「ッ、あ、す、吸い付いて、離れな...っ！んん、ず、ずっと舐められ、え、ん、んゝんんっ！」

既に喋れないほど感じているのか、溝口君は顔を真っ赤にしながら、必死に上半身をよじっている。それでも手足やお腹に拘束用の触手が巻き付いているので、あまり抵抗らしい抵抗はできていない。

おそらく常に粘液を纏う触手なので、ヌルヌルの触手内で、更に細かな触手が彼の乳首を徹底的に舐めまわしているのだろう。じゅるる、という卑猥な音も聞こえてくるので、どうやら強い吸い付きも同時に行われているらしい。既に人間には施せない愛撫が両乳首に行われているのを見て、私も研究欲が刺激される。

「ねえねえ、それ中はどうなってるの？吸い付きはどのくらいの強さ？」

「はふっ、んん、んんんんっ！っひ、ああ、や、だめ、だめ...！」

「ダメじゃなくて教えてよ」

「～～～ッッ！！！！？ひ、やだやだ、も、しつこい、うう、や、あゝ、あああああ...っ！」

「むう...！私の質問すら聞こえないほど溝口君が感じまくっているとは...。やるね、触手君」

しかしながら私に協力してくれるはずの溝口君が、既に触手で気持ちよくなってしまっているらしい。質問に受け答えできないほど感じているのは、彼の股間を見ても分かる。感じながら詳細な刺激を語るのは難しいと思うので、私は彼に近づいて、乳首を吸う触手の片方を拝借することにした。

ただし私が触手を掴んで引っ張ると、獲物を横取りされると思ったのか、触手は強く吸着して余計に離れなくなってしまった。

「ちょっと失礼。中を見せてね」

「ふ、あ、あ、だめ博士、引っ張らな、あ、あううっ！」

「ん〜、取れないなあ。むしろ引っ張るとなおさら外れにくい気がする」

「んううう、っ、は、早く取って、それ、外して、くださっ」

「私に言われてもねえ。触手君に伝えてもらわないと外れないよ、コレ」

「ふっ、う、や、もお舐めるなあ...っ！はあ、あ、んぎっ、乳首、おかしくっ、うううんっ！」

より強い吸着音を立てて溝口君の乳首に吸い付く触手は、半分意固地になっているように感じる。まるで玩具を取られたくない子どものような行動だ。ただ、この触手は私たちの言葉のある程度理解している気がする。さっき溝口君にけしかけた時もそうだし、今も溝口君が拒絶したら怒ったように思う。だったら逆に説得も可能なのではないかと、優しく触手を撫でながら話しかけてみる。

「ごめんねえ、溝口君ったら言葉が乱暴で。でも君の生みの親に報告しないといけないから、ちょっとだけこの中を見せてくれない？終わったらまた溝口君と遊んでいいからさ」

そしてこれがとても効果的で、ふむ、と一旦考える素振りを見せた触手は、私が撫でた方だけをさっと乳首から外した。反対側は張り付いたままだけれど、内部構造が分かればいいので問題ない。会話が通じる程度の知能があることも分かったので、溝口君ではなく触手君に問いかけながら観察を進めることにする。乳首に吸い付いていた触手は、筒状の触手の先が口のように広がり、縁はぷにぷにと柔らかい。筒の内側と奥の方には、先ほど見えた細い触手が大量にうごめいていて、全方位をカバーしていた。

「おお～すごいね。筒のなかにびっしり細い触手があるのか。どれ、ちょっと指で失礼」

感触にも興味があったので、私は触手の筒に人差し指を入れてみた。触手君は心得たとはばかりに、溝口君の乳首に施していたのと同じ愛撫を私の指にも行ってくれる。

もきゅもきゅと収縮しているので、空気圧で揉みしだかれているような感覚だ。その中で細い触手が、ぬるぬると全体を舐めまわしている。舐めながら吸われた時は、それが指だとしてもかなりぞわっとした快感が襲う。なるほど、これを両乳首で行われたらああもなるかと、先ほどの溝口君の様子に納得した。

しかもこの触手、芸達者で時々チクチクとした刺激を与えてくる。痛いというよりは、痒いに近いような感じだ。おそらく中の触手の数本が針のような形に変わっているのだろう。それでつん、つん、と淡く突いてくる。そしてチリチリと痛痒くなった場所を、執拗に舐めまわしてくるコンビネーション。この絶妙な愛撫に、溝口君が股間を固くしてしまうのは仕方がない。

「なるほど。形を変えるだけじゃなくて、硬化したりもできるわけか。これで両乳首をぬるぬるにされたらひとたまりもなさそうだね」

「んは、あ、ああう」

「あれ？なんかまた別の触手が溝口君の乳首を舐め舐めしてるね？」

「ひ、ッ、こ、これ、ホントに、人の舌みたいで...！ううあ、あ、や、ああああっ！」

けれども私が吸い付き触手に夢中になっていると、空いた方の溝口君の乳首が、別の触手に襲われていた。今度は複数本の触手が、彼の乳首にまとわりついている。さっきの筒状のものとは違って、先端が平たく、特殊な動きは少ないようだ。感触は人間の舌に近いと言っていたから、溝口君からすると複数人に同時に舐められているような感覚なのだろう。強いて言うなら太さが様々なので、細いものは彼の乳首に巻き付くこともできる点が、人間離れしている特徴かもしれない。

「くふ、うううっ！は、あ、や、やめっ、ん、んんっ！」

「なるほど、同じ動きをする触手でも、太さを変えられるわけか。となるとこの触手は、相手に合わせてかなり自由に形を変化させられるみたいだね。目がどこにあるか分からないけれど、この触手で触れて形を把握してるのかな？」

「ひぁ、あ、も、取って、取ってください...っ！舐められるの、嫌でっ」

「ちょっとメモしてるから待ってもらっていい？」

「〜〜ッ...！！」

乳首を責められるだけで、溝口君はビク、ビク、とお腹や足を震わせて感じていた。私との実験のあれこれで彼の乳首も敏感になったのかもしれないけれど、それを加味しても相当気持ちいいと見ていい。もしかすると彼の反応を見て、どう責めるのがいいかを判断している可能性もあるなと、メモを取りながら考える。けれども悠長にメモに書き込んでいたら、とうとう溝口君がぐずりだしてしまった。仕方がないので自分の指に付けていた触手を戻して、観察メインに切り替えるでしょう。

「んは、ああ、も、嫌ああっ！助けて、助けて博士っ！はう、うう、も、もう、十分っ、データは取れて」

「よしよし、遊びの途中に見せてくれてありがとうねえ。もう溝口君の所に戻っていいよ～」

「なっ、なぜですか！それはいらなっ、やっ、来るな、ああああダメダメっ、吸うな、あゝ、んああああっっ！！」

私の左手に吸い付いて実験協力してくれた触手を戻すと、元々乳首を責めやすい形状の筒状触手が再び乳首を陣取った。喜びを体現するかのごとく強く吸い付く触手に、溝口君は身体をのけ反らせて声をあげていた。随分しつこく舐めまわされていたせいもあり、感じやすくなっていたのかもしれない。

一方で責める場所を奪われた舌型触手たちは、乳首を諦めて別の場所を責めることにしたらしい。細い触手は彼の耳をくすぐり、太い触手は脇を舐めだしたニッチな場所にも興味があるのか、おへそやお腹周り、背中も舐めている。それから彼の反応のいい場所に焦点を絞って、乳首と同時に舐め始めた。

「ひいいっ...！んあう、うう、あ、や、あ、ああっ！」

「人間だったら一人につき舌がひとつしかない計算だから、溝口君が舐められている箇所を想定すると、10人くらいに同時責めされてると考えられるかな？どう？やっぱり気持ちいい？」

「は、は、あ、や、そんなところ...！うう、うゝ ～～...っっ！」

「なるほど、どちらかと言うと慣れないマニアックな場所を舐められる羞恥心が勝つのか...。君みたいにプライドの高いタイプには、変わった場所で感じる自分を認知させる責め方が効くかもしれないね。あ、触手君、溝口君は時々不意打ちで耳や脇腹をくすぐったらいい反応すると思うよ」

「ッ！！？や、いい、いいからそんな、あ、は、はああううんン.....
っっっ！！」

ぬるぬると全身を舐めまわす触手君は、溝口君の様子を丹念に観察しているのか、舐める速度や強度にも注意を払っているようだった。私のアドバイスを素直

に聞き入れて耳と脇腹を時々さわさわとくすぐると、ビクンと溝口君の身体が跳ねたのがお気に召したのか、別の場所を舐めて油断させては、時に激しく責めていた。

けれども触手君が喜ぶ半面、弱い場所ばかり舐められている溝口君からすると、時間とともに快感が重くなっている。それが嫌なのか、彼は半泣きで私にすがってきた。

「ひううう...っ！あ、あ、も、や、博士っ、博士え...！終わりたい、もう、もう無理ですっ！」

「え、そうなの？まだ始まったばかりって感じもするけど...。どうかな触手君。溝口君は嫌がってるみたいだから、もう終わりにする？」

ただしいつもの実験なら私に終了権限があるけれど、今日は触手君に権利がある。強制終了をするには触手君に力で打ち勝つ必要があるので、無理なら従うしかない。だから触手君に聞いてみたものの、まだ満足していない触手君は、むちゅううと乳首に吸い付いて否定の意思をしめしてきた。そのせいで溝口君はビクビクと全身を痙攣させていたけれど、大人しく触手君の遊びに付き合わなかった彼が悪い。

「んひいいゝッ！！？はぁう、だめ、吸い過ぎ、強い、強いいい...！！」

「残念だけど、触手君はまだ君と遊びたいみたいだよ？」

「なぜ博士はこの物体とコミュニケーションが取れるんですか！？意味が分からな、あ、や、や、何なになにっ！！？」

溝口君は終わりたくとも、触手君から続行を言い渡されたので拒むことはできなかった。こうして継続されたお遊びはヒートアップし、次は溝口君の下半身を責める流れに変わっていく。

拘束していた足を上に持ち上げ、パカリと大きく開脚させた足の間に、後ろからひと際太い触手が回ってきた。巨大な尻尾を前に回したような触手の股間側には、びっしりと小さな触手が並んでいる。歯ブラシのように隙間なくみっちりと並ぶ細い触手がざわざわ動く様子は圧巻だったけれど、問題はそれが溝口君の股に近づいていることじゃなかろうか。

「や、やっ、近づいて...っ！？やだ、そんなのくっつけるな！」

「でも嫌って言っても、溝口君の足は閉じれないし。大人しく舐められるしかないんじゃない？」

「〜〜っ、他人事だからって！だったら博士がやれば、あ、あっ、んゝ ああああ あ.....ツツ！！？」

そして言語理解の能力があるくせに溝口君の言葉は無視する触手は、ぺとりと大きな触手を彼の股間に貼り付けた。そのままぞりぞりと後ろに移動していたので、彼の股間一帯が小さな触手に刺激されることになったはずだ。しかも一度後ろに下がったら、今度は前にも移動してきたので、交互にまんべんなく擦られている。

「んひいいい...っ！！ふぁ、ぁぁ、や、だめこれ、ッ、ぁ、んんんゝんゝうう
ううっ！」

「すごいねぇこの触手。大きな面で君の性感帯を広い範囲で刺激できるなんて」

「はふう、うううんッ！や、ぁぁ、もういい、も、ぁ、ぁぁあっ！」

「足がガクガクしてるね溝口君。そんなに気持ちいいの？」

「ん、んゝっ...！気になるなら、博士も、してみたらいいじゃないですか...

！！」

だけれど一丁前に精神力がある溝口君は、私の問いかけに対して顔を真っ赤にするくせに、ギンと私を睨みつけてとんでもないことを言うてくる。さすが溝口君、この状況でも憎まれ口は健在だ。

ただし私とは口論できても、触手君とは喧嘩ができない。一方的に責められ放題の彼は、相変わらず乳首を舐めまわされているし、股間回りも捉えられている。触手の前後運動の速度は規則性がなく、ゆっくりな時もあれば早いときもある。それが溝口君にとっては、予想できないから苦痛のようだ。

「ふう、うう、んんんうう...っ！ぁ、ぁ、やだ、ゆっくりするの、やぁぁ...
っ！」

「触手君、溝口君はゆ〜〜っくり舐められるのが好きみたいだよ。そのまま続けてみたら？」

「〜〜っぁぁぁぁぁ...！んひ、いい、嫌、ぁ、だめ、ダメって言って、う
う、うううんっ！」

私に対して生意気な溝口君に痛い目を見せるには、触手君に手伝ってもらうのが早い。既に何度も実験してきた私は、溝口君が本気で感じているかどうかは表情を見れば分かる。せっかくなので触手君にとってメリットのある助言を試みると、気をよくしたのか、触手君はことさらゆっくり股間のブラシ触手を動かし始めた。その様子を私も間近で見える。

溝口君の股間に密着した触手は、内側の小さく細い突起触手たちを不規則に動かしながら、溝口君の自身を擦っていく。亀頭やカリ、竿から双球、蟻の門渡りを隙間なくヌルヌルに舐め上げてから、また同じ場所を反対方向に擦る。

「んふ、ッあ、あああああっ...！！だ、め、嫌、もう、もう嫌、止めて...！止めてください博士え...！」

「止めてって言われても、私には止められないよ。頼むなら触手君に頼んで」

「ん、んっ、や、ああ、だってこれ、止まらな、あああっ！ひ、だめ、だめ、ほんとにだめ、も、う、うゝ〜〜〜ッッッ！！」

そして乳首の筒状触手の強い吸い付きと、ブラシ触手の愛撫を続けられるうち、溝口君はとうとう我慢できなくなっただけ。ぎゅうう、と身体をこわばらせたかと思うと、ちょうど股に埋まる触手がお尻側に行ったときに射精していた。達した瞬間をまじまじと見るようになった私は、あの溝口君にしては我慢弱くらいだったなと評価したけれど、触手君は慌てたように彼の性器に群がった。ざわっと複数本の舌触手が亀頭の周りに集まり、必死に彼の精液を舐め始める。これには溝口君もたまらなかったのか、硬直した体を一気にほどいて暴れ出した。

「ひゃ！？ああッ！！なに、なにいいっ！！？」

「いや、私も分からないよ。君が射精したら急に動きが変わったね」

「んんっ！あ、あ、だめ、今舐めるなあ...ッッ！！なんで、そこばかり、うう、うううんっ！！」

射精直後の過敏な性器を、ぺちゃぺちゃと舌触手が舐めまわしている。でもその動きをよく観察すると、特に精液のついた場所をしつこく舐めているようだった。そのせいで亀頭の周辺は執拗に舐められている。男なので気持ちは分かるが、私が溝口君と同じ立場なら悶絶してしまうだろう。けれど今は部外者なので、私は触手の行動パターンをメモさせてもらう。

「おそらく生命体は、精液が好物、っと...」

「ひぎ、ッ、あああう、や、あ、も、許しっ...！んんっ、あ、や、やあああ！？」

味が気に入っているのか、そもそも精液を栄養分として補給したいのか、目的は今のところ不明だ。けれども精液そのものを舐め取りたいのは確かなようで、舌触手は彼の射精を促すように、ぺちゃぺちゃと先端部分を舐めまわし始めた。ある触手は亀頭を擦るように舐め上げて、他の触手はカリを刺激するものもある。竿の部分の上下にねっとり舐めているものもある。多人数から舐められているのと同じ状態の溝口君は、ぐっと背を反らして震えと、もう一度精を吐き出していた。

「ああああ...っ！だ、め、もう無理、イク、またイッ、嫌、やああああっ！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー